

---

# 鈍器放って

めいそ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈍器放つて

### 【Nコード】

N5173Y

### 【作者名】

めいそ

### 【あらすじ】

ミステリ小説を読みすぎて自分のことを探偵だと思いこんでしまった老人の話。

「瀬番せつがいです。探偵をやっております」

初対面である瀬番老人から私はそう挨拶を受けた。

勿論私はそれに面喰った。

「え、探偵をされてらっしゃるんですか？」自己紹介も忘れ、そう聞き返した。

「はい。今までいくつもの事件を解決してきました。ここで起った密室殺人の謎を解いたのも私です」瀬番老人は目をきらりと光らせる。「ところであなたのお名前は？」

「し、失礼しました。私は三町平子みまちへいこと言います。二週間前からこの職員をやっているんですがお会いするのは初めてになりますね。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく申し上げます。三町平子さん、とはいささか変わった名前ですね」

「そ、そうですね？」瀬番の方がよっぽどレアじゃないのかなあ、と思ったが口には出さず、私は気になっている事を質問した。「ここでの事件というのは？」

「数ヶ月前、この棟の屋上で一人の老婆が殺されたんです。彼女は私と同じ施設利用者でした。可哀想な事にちよつとばかし変な行動を起こす癖がありましたかね。それで」

瀬番老人が語りに入ろうとしたその時、私は後ろ袖をぐいっと引っ張られた。振り向くと、私と同じく職員をやっている風車かたぐるまよし子さんが仁王立ちしていた。彼女は背が高い。170センチはあるだろう。そしてその高みから私を見降ろしている。五十代半ば、皺が顕著に表れ始めていることを除いても、その眉間には皺が寄っていた。

「あのね、三町さん。あなたは新人だから言ってあげるけど、こ

この人の言う事をなんでも真に受けるのはやめなさい」風車さんは私の耳元に顔を寄せて言う。「そりゃあ話を聞いてあげるのはいいいことだと思っけどね。でも神経まいるわよ。特に瀬番さんは推理小説を読みすぎて自分を探偵だと思いきんじゃった特別の変わり者だから」

私は「すみません」と頷く。少し言い方は悪いが、彼女の言う事も正しい。ここは老人性認知症疾患デイケア施設なのだから。「でも真に受けてるわけじゃないんですよ。私もあいうミステリが好きで、瀬番さんがどんなお話を組み立てているのか興味があつたんです」

「あなたも変わり者ね。でも瀬番さんの推理なんて支離滅裂よ。それにその話、あたしが犯人役にされちゃってるんだから」

「え、そうなんですか？」私は噴き出しそうになるのを堪える。

「ええ、多分瀬番さん、あたしの事嫌いなんだと思うわ。でかいし怖いから」

「いえ、そんなことは」

「ま、そんなに興味があるなら聞いてみなさい。噴飯ものの推理だから」風車さんは肩をすくめる。「それよりもそろそろ手工芸の時間よ。早く準備しなきゃ」

クリーム色の壁紙の、高い位置にある壁掛け時計を見る。時計の短針は十の数字を指していた。

「あ、いけない」私は瀬番老人の方を向き直る。「瀬番さん、その話、また後で聞かせてくださいね」

2

今日の手工芸はカレンダー作りだ。もう十一月になるから来年の初め、一月のものを作る。余裕のある人は二月のものも作る。

わいわいと和やかに大きな一つのテーブルを囲んでそれぞれの作業が進む。

「みなさん、糊をなめちゃだめですよ。これは紙を貼る時に使うものですからね」同僚の路枝南みちえだみなみさんが説明すると、「そのくらいわかっとなるよ」とか「幼稚園児じゃないんだから」といった笑声が広がる。幼稚園児まではいかないまでも小学生くらいではあるな、と私は思う。人間年を取ると本卦還りの三つ子という言葉にあるようにどんどん幼くなっていく。本卦還りとは還暦のことなので、高齢化の今の時代からすると少しきびしいかもしれないが。

みんな一様に、丸っこい紙切り専用ばさみをじよきじよきと動かして、カラフルな厚紙を形通りに切り取っていく。そうやって切り取られた厚紙を一枚の紙の上に貼っていくことでカレンダーの絵柄部分が出来上がっていくのだ。

こんな平和な工作の時間だが、私のミスによって事件が起きた。

「あ、有ありと弩さん。そこ間違ってますよ」隣で作業をしている有弩夫人に私がそう指摘すると、有弩夫人は泣き出してしまったのだ。

「わ、すいません」私は急いで謝るが、有弩夫人は聞き入れてくれない。

「三町さん、みなさん傷つきやすいんだから少々目につく行動があっても普通と同じように注意してはだめよ」路枝さんが私にそう言ってから、有弩夫人を慰めにかかる。「有弩さん、大丈夫ですからね。ほらこんなに上手じゃないですか」

しかし有弩さんは首を振って受け入れない。しまったなあ、私は自分の軽率さを悔いる。

「有弩さん、そんなに泣いちゃあ美しいお顔が台無しですよ」そこで颯爽と登場したのが自称探偵の瀬番老人だ。有弩夫人の手を取って、手の甲に口づけをする。きざだがなかなか様になっていた。

周囲から歓声が上がる。有弩夫人も瀬番老人の行動がおかしかったのか、それとも嬉しかったのか知らないが、とにかく機嫌を戻したようで、泣くのをやめて瀬番老人に向けてほほ笑んだ。

「瀬番さんは有弩さんを好きなのよ」突然、背後から風車さんが小声で私に声を掛けた。「それにしても瀬番さんってきざよね」

「わっ、風車さん、どこに行つてたんですか」私は驚いて軽く悲鳴を上げる。そういえばさつきから姿を見なかった。

「どこつて、お風呂に決まってるでしょ」

あ、そうか。入浴サービスをしてあげないといけないんだっけ。それが終わつたから今しがた部屋に何人が帰つてきたのか。私はこつちを担当していたから気がつかなかつた。

3

正午になり、食事の時間が始まる。

今日のメニューは豚の生姜焼きとほうれん草のおひたしと味噌汁と白飯。豚肉はとても柔らかい。やはり高齢者の食事にはなかなか気を使うのである。

職員である私も一緒に昼食を取る。私は瀬番老人の隣に陣取る。食事中に話をするなんて行儀が悪いけれども、どうしてもさつき話していた「ここで起こつた事件」とやらを聞きたかつた。

その旨を伝えると、瀬番老人は嬉しそうに、「そうか、聞きたいかね?」と言つた。顎に手を当てて自前の白ひげをいじっている。

「うーむ、どこから話せばいいやら」

「この利用者の方が殺されたんですね。この棟の屋上で」私は水を向ける。

「そう、この棟の屋上です。しかも密室ですよ」

「しかし屋上は壁がないじゃありませんか、屋上なんだから。それじゃ密室にならないでしょ」この施設は総合病院の一部門であり、今私たちがいる部屋はB棟の一階にある。「それに高齢者が、三階のさらに上にある屋上まで行けますかね」

「まあそう一度に聞きなさんな。焦ると論理的思考ができませんよ」瀬番老人は湯呑を口元に運ぶ。

「すいません、以後気をつけます」

「じゃあまずは被害者の老婆がどうやって屋上にまで辿り着けた

か、ということから説明しましょう。彼女はまずエレベーターに乗って三階まで行き、その後普通に階段を上ったのですよ。彼女はただ六十八歳でした。年寄りでも緩やかな階段くらい上れますでしょ？」

「は、はあ」

「それから密室というのはつまり、屋上の出入り口の鍵が閉まっていたんです。内側から」

「でも一利用者が簡単に屋上に入りたり、鍵を掛けられますかね？」

「簡単な事です。先ほど私は、彼女には変な行動を起こす癖があったと言いましたが、その変な行動というのは盗癖のことなのです。つまり彼女は職員のと鍵を盗んで屋上に入り、そして自分で鍵を掛けたわけです」

「なるほど」

「そしてここで何者かに殺されていた。頭を強打されて！」

「こけて頭を打ったんじゃないんですか？」私は聞く。瀬番老人ではなくその老婆の事だ。

「いいえ、あれは確実に頭を鈍器で強打されておりました。私が証人です」

「それはいいとしても、壁がないんだからやはり全然密室じゃないと思いますよ」

すると瀬番老人はむっとした顔で反論する。「それじゃああなたは殺せますか？ いくら壁がないとはいえ、よじ登る事もできない四階の高さの空間の中にいる人間を」

「い、いえ」私はたじろぐ。それは極論だろう。「そ、そうだ。犯人は風車さんなんでしたっけ？」

「いかにも。但しそれを立証することは困難でした。何しろ彼女はB棟とは向かい合わせのA棟にいたのだから！ その上、二つの建物の屋上は直線距離で五〇メートルほどもあるんです！」

「そ、それは難しそうですね」うわあ、一気にきな臭くなってき

たぞ。A棟にいるよりB棟にいた方が難しいと思うけどな、個人的には。

「はい。しかし私は真相を突き止めたんです。風車さんの凶行の真相を！」瀬番老人の鼻息が荒くなる。

「それは一体？」一応私は聞いてみる。

「それは帰る時に話します」瀬番老人は私の質問を突っぱねる。

「そろそろ映画を観る時間ですよ」

……つたく、この瀬番老人は探偵の悪い癖だけはちゃんと真似できているらしい。これでロクでもないトリックなら怒るよ私は。

#### 4

映画は隣のトトロだった。老人たちは大喜びしてトトロとメイとさつきの活躍を追う。あの田舎の風景が心の琴線に触れたのか泣きだす人も何人かいた。ちなみに一番多かったのは居眠りをする人たちだ。

それでもジブリの映画は受けがいい方だ。老人は難しい映画をあまり好まない。何もかもわかりやすいのがすべてなのだ。それでいてよく練られたお話でないと満足しないのだから映画の選定は難しい。

映画を観終わると今度はレクリエーションが始まる。室内にペトボトルのピンを並べて、ゴムボールを転がして倒すボーリング。これは意外と盛り上がる。一本倒れたとか二本倒れたに一喜一憂する老人たちは見ている微笑ましい。途中でうんちを漏らしてしまう人もいたけどここでは日常茶飯事だ。路枝さんは嫌な顔一つせず片付ける。私も雑巾を持ってきて床を拭いた。

そしてその次はおやつ時間。水羊羹とほうじ茶をみんな喜んで食べる。

この辺りになると疲れて寝てしまう人が多くなる。大して運動していなくても、老人になると起きているだけで体力を多く消耗する

のだ。しかしながら心地よい疲れなのだと思う。みんな笑みを浮かべながら目をつむっているからだ。一日中TVを眺めながらうつらうつらするのは天と地ほどの差もある。ここにいる多くの人がそういう経験もしてきているだけに、人との関わりにはすごく価値を感じているはずである。そしてそういう姿を見ると、この仕事がまた好きになるのだ。

食べ終わった皿を片づけながら、私はこの後の瀬番老人の演説を半分だけ楽しみに思う。舞台立てがまいちなのでトリックの方も推して知るべしではあるが、どんな答えが飛び出すのか、それが気になっている。

さて、お待ちかねの帰りの会の時間がやってきた。といってもそれは職員にとつての話。老人たちは帰るのを嫌がる人が多い。ここにいれば誰かが常に構ってくれる。しかし家に帰れば誰からも相手をされない。その気持ちはよくわかる。

「瀬番さん、そろそろ教えてください。私にはお手上げです」私は瀬番老人に声を掛ける。

「うむ」そうだろう、というように瀬番老人は頷く。「三町さん、さつきも言いましたがA棟の屋上からB棟の屋上まで五〇メートルくらいはあるんですよ」

「はい」

「だから私も唸りましたよ。どうやってたら風車さんはあの老婆を殺害できたんだろう、とね」

おい、趣旨が変わってるよ。

「それでどうだったんです」

「こつという容姿の事を悪く言うのは気が引けるんですが、風車さんガタイがいいでしょう。そこにトリックがあると私は気付きました。そこから導かれる答えは一つ。風車さんは鈍器を投げたんですよ。A棟の屋上からB棟の屋上へ向かってね！」

やはり予想が的中した。外れてほしかった。

「でも五〇メートルも距離のある場所に、人を殺害できるほど重

さのある鈍器を投げられますかね？ 砲丸投の世界記録でも二〇メートルともう少しがせいぜいでしょ？」

「ふふ、ハンマー投ですよ」瀬番老人は勝ち誇った笑みを私に向けた。「ハンマー投なげなら五〇メートル以上の投擲も可能です。それに十分な威力もある！」

「ハンマー投っていうとワイヤー付きの鉄球を、ワイヤーを持ってグルグル回ってから投げるあれですか？」

「そうです。長いワイヤーを付けておけば回収だって可能です。こうして風車さんは可哀想な老婆を殺めたわけです。以上QED（証明終わり）」

何がQEDだよ、と私は思った。これ風車さんの名字から連想してるだろ絶対。しかも別に風車さんでなくてもA棟にいる人間なら誰にでもチャンスはある。その上白昼堂々そんなことをやったら確実にばれるし、よく考えるとA連の屋上にも鍵はかかっていたはずだ。駄目押しに、そんなに狙って当てられるものなのかそのハンマー投とは。一体何回投げ直すつもりだよ。とまあ簡単に考えてもこれだけ矛盾点が見えてくる。つまりこれは穴だらけの推理と言う事だ。

「な、なるほど。快刀乱麻の名推理とはこのことですね」しかし私は寝めた。だって否定するのはあまりにも可哀そうだった。気持ちよく名探偵のまままでいさせてやる。これが福祉の精神だ。……風車さんには悪いけど。「さて、それじゃあ帰りのバスに乗りましようね」

施設を出るとすでに日は暮れかかっていた。一月ともなると午後四時には空は赤く染まる。冷たい風が強弱をつけて私たちに襲いかかる。誰かが北風小僧の寒太郎を歌い始める。

「きつたかぜー、ござーのかんたるー」

「かんたるー！」

最初に歌い出した人が妙に上手だったので、つられて何人かが復唱する。みな年月の経過を思わせるしわがれた声だった。それに応

えるかのように、北風がまたびゅうつと吹く。私たちは震える。

私たちは送迎バスに乗り込む。暖房が利いていて私ですら眠気を感じる。私は風車さんの隣に座ってさつき瀬番さんから聞いた推理を説明する。

「それあたしも突き付けられたんだけど与太話以外のなにものではないわよね」

「確かに穴だらけだと思いましたが。でも風車さんを風車にした所なんて私感心しましたよ」

「瀬番さんの事件ファイルいっぱいストックがあるから、また聞いてみなよ。どれもユニークだから」

「ところで、実際はどうやって殺されたんですか、その女の人？」

「ん？ 殺された人なんていないわよ。それ創作よ、瀬番さんの風車さんは言う。「そういえばその話を作りだすちよつと前に、有賀さんが転んで額を切ったの。傷は浅かったんだけど血がどくどく流れてさ。瀬番さんそれを見て気を失いかけてたもん。多分その時のショックがあたしへの嫌悪と結びついたんだろうね」

「な、なるほど……」

「実際、利用者を一人で屋上まで上がらせて、その上殺されちゃったりしたら大事件よ。この施設潰れるんじゃないかな」

「そりゃあそうですね」

「うん。あ、うちが見えてきた。それじゃあね」

「はい」私は手を振る。

その際、前の席の方を見ると、瀬番さんがまたもや何かの事件を他の人に解説していた。その姿は妙に真に迫っている。世の中色々な人がいるもんだ。私はほほ笑む。

それにしても、探偵に成り切っちゃうなんてよっぽど探偵が好きだったんだろうなあ。

5

以下、路枝南によるセンター長への報告書から抜粋。

三町平子さんについて：「彼女が他のデイサービスからこつちに移ってきた時はどうなるかと思っただけれど、だんだんとみんなになじんできました。時々余計な世話を焼こうとする傾向はあるけど、掃除などを積極的に手伝ってくれるので助かっています。」

風車さんのことは未だに職員仲間だと思っっているようです。風車さんは症状は軽いけれど世話焼きに関しては共通しているのでは、りよく気が合うのかもしれませんが。

今日瀬番さんと初顔合わせだったんですが、症状が似ている者同士というか仲良くやっていました。

知能はあまり低下していないようです。この調子で様子を見ていきたいと思います。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5173y/>

---

鈍器放って

2011年11月17日21時24分発行